

国内研修成果報告書

～障害を持つ人の地域・社会とのつながり～

日時：2024 年 8 月 29 日～8 月 30 日

場所：長野県長野市

参加人数：4 名

【研修先】

1. 社会福祉法人 長野コロニー
2. 社会福祉法人 花工房福祉会

1. 社会福祉法人 長野コロニー

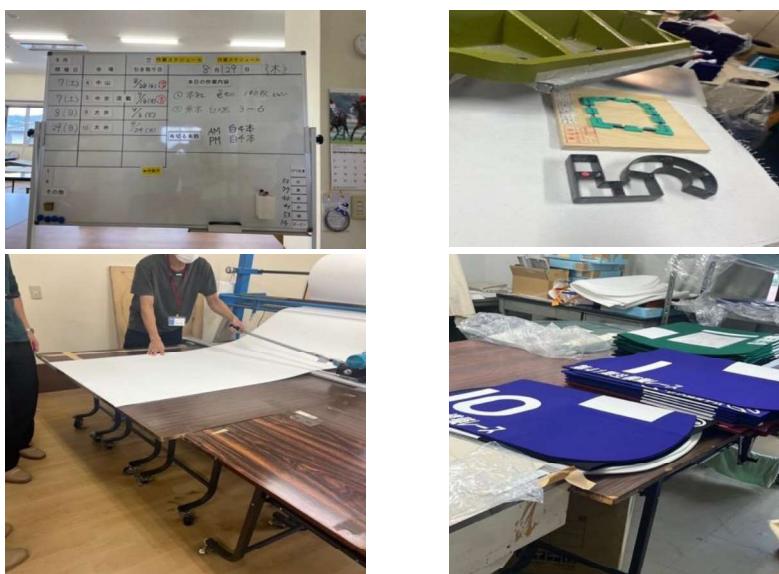
8月29日、私たちは社会福祉法人「長野コロニー」さんへ見学に行った。まず、長野コロニーさんは、ゼンコロ・ネットワークという戦後、荒廃と窮乏の中で生まれた結核回復者によるコロニー建設運動により、自らの「働く場」と「生活の場」づくりを成し遂げて全国各地にできたコロニーの一つである。今では、その全国にできたコロニーを「全国コロニー協会」として結成し、その後名称を現在の「ゼンコロ」へと改称し、全国に10法人約4,200人が集う日本の中でも大きい社団法人になっている。そして、「国連障害者の10年」それに引き続く「アジア太平洋障害者の10年」など、障害のある全ての人々のノーマライゼーション・バリアフリーのための運動を社会就労センター協議会（SELP）と共に実現してきた。

社会福祉法人長野コロニーは、長野県で活動している社会福祉法人で、主に障害者支援や福祉サービスを提供しています。この法人は、障害を持つ人々の自立支援や、地域社会との共生を目指して、さまざまな福祉施設やサービスを展開している。

法人は人の存在はそれ自体導く厳かなものであり、個人の尊厳は障害や疾病の有無によって分け隔てられることのない普遍的なものであり、「1.障害のある人が地域で普通に生活し就労することを目指します。2.障害のある人を個人として尊重し支援を行います。3.先達が苦難の中で切り拓いた道を発展させ障害のある人にとっての社会的障壁を取り払うように努めます。」という理念を掲げている。また、利用者の意向を尊重し、様々な福祉サービスの中から利用者のニーズにあった就労、生活の場、訓練、介護等のサービスを総合的に提供できるよう工夫されていて、利用者が自立（自己決定）した日常生活又は社会生活を営むことができるような支援をされていた。

その中で、篠ノ井施設と若槻施設に訪問した。篠ノ井施設は、施設の入所支援・生活介護・就労継続支援B型・短期入所の支援を行う指定障害者支援施設である。今回は主に、就労継続支援B型と生活介護を見学した。生活介護は、手先の訓練や大人数での過ごし方などを訓練していた。また、手が不自由な人は机などに固定して作業の効率を上げるように空がされていた。この就労継続支援B型は生産活動として、箱折り、果物等の緩衝材加工、お土産の箱詰め・紅茶詰め、ペンケース加工作業、JRAの競馬ゼッケン転写、こんにゃく作り等行っていた。その中でも、大きなベースとなっているJRAの競馬ゼッケンは、大きな布から形を作成したり、滑り止めや番号をつけたり、GPS用のポケットの作成などを行っていた。作業は、朝9時～16時（休憩あり）の時間で行なっている。1日に大体300枚から400枚のゼッケンを生産しており、多い時では500枚ほどつくることがで

きる。作業所内では、作業スケジュールが張り出されており、今まで一度も納期に遅れたことはないと話していた。しかし作業は、2、3mm ずれてしまうと不良品になってしまうほど細かいもので非常に技術のいるものだった。難しいスファ行だからこそ、作業効率を上げるために型を端にあわせて縫えばできたり、大きな布を裁つときは机の端に合わせれば良かったり、機械が誤作動しないために二段階で起動するようなど工夫がされていた。やりやすいように工夫がされているとはいえ、作業はやり方を覚えたり、できるようになるまでが大変だったりと重労働なもので、利用者さんの高齢化とともに作業にも人気なものと不人気なものがあったり、どうしたら利用者さんの意欲を掻き立てられるのかという点で苦労していると話していた。



次に私たちは、若槻施設を訪問した。この若槻施設には、はあてい若槻という多機能型事業所と長野福祉工場という指定就労継続支援A型事業所があった。はあてい若槻では、利用者の方に重度の障害を持つ人もしくは介護が必要な人が多くいて、労働基準法適応外で仕事を望んでいる人たちに日々仕事ができるような支援を行っていた。リンゴや桃などの果物を守るクッション材の作成や空き缶潰し、生活介護として創作や季節の行事を楽しむイベント、音楽療法なども取り入れて支援をしておりとても和気藹々としていた。長野福祉工場では、主に印刷・縫製を行っていた。縫製に関しては篠ノ井施設と同様にJRAの競馬ゼッケンの作成を行っていた。若槻施設と篠ノ井施設の違いは若槻施設がA型事業所で、篠ノ井施設がB型事業所であるということだった。また、この若槻施設が指定就労継続支援A型事業所は、障害のある人だけ利用料を取るのとは理念に背くため、利用料の負担を事業所側が負担してため利用者個人の負担はないのが一番大きな特長である。印刷部には制作課と製造課に分かれており、大きな機械を海外などから特注で仕入れて作業していた。作業は基本的にずっと同じ作業をしていることが多いが、利用者さんによってはローテーションをするなど作業効率の維持を工夫していると話していた。



2. 社会福祉法人 花工房福祉会

8月30日、私たちは社会福祉法人「花工房福祉会」さんを訪問した。平成11年「花工房エコーンファミリー共同作業所」開設されその後、知的障害者通所授産施設エコーンファミリーや共同生活介護ケアホーム「さんふれんず」開設などを行なってきた。そして、平成19年多機能型事業所（就労移行・生活介護・自立訓練）へ移行、また平成21年には、多機能型事業所（就労移行・生活介護・就労継続支援B型）に変更された。法人の理念として、「ともに生き、ともに暮らす」を合言葉として、障害者も地域の中であたりまへの生活を営むことを応援し、より良いサービスを提供する法人として歩んでいくことを掲げている。主な事業内容としては、パン・菓子製造・販売／豆腐製造・販売／花卉、野菜栽培・販売、花植栽／炭・炭加工品製造・販売／受託作業各種／施設外就労等を行なっている。その中でも、受託作業各種／施設外就労については、農業の分野で企業や農家との連携をし、地域のつながりを非常に大切にしており、清掃業や箱折り作業、梱包作業などを企業から受託し行なっていた。また、平成26年度4月よりエコーンファミリーから独立した「炭房ゆるくら」はゆるやかな暮らしゆるぎない生活を掲げ、山から代した木で薪を作り、炭焼きをしている。里山を大切に、地域を元気に、自然と共生し、お客様に温かいエネルギーをお届けしながら利用者と地域を笑顔で結ぶ迎点として活動していた。



3.フィールドワークを終えて

今回の長野での国内研修では、フィールドワークをすることで本やインターネットからは学ぶことのできない現場の生の声や状況を自分の目で見て、聞いて感じる事ができたことが私にとってとても貴重な体験になった。長野福祉工場では、障害を持ち実際にその事業所で働く人たちに生活する中で思うことや現在の状況、仕事に対する生きがいなど踏み込んだ質問もあった中でお答えしていただき、今学生である私に何ができるのかを改めて考えさせられた。今日本では、障害者の方が社会の中へという意図でこのような事業所を廃止しようとする動きがある。これは本来目指していく形であるのは理解できるが、それが本当に全ての人にとって良いことなのかはとても疑問に思った。障害を持つ人にとって事業所は相談しながら自分に合った形で仕事や生活をする事ができる場として存在しており、改めてこれらの社会福祉法人は社会や地域に大きな役割を果たしていると認識することができた。今回自分の中で感じたことや考えたことは、今後の自分の研究に繋げていきたいと考える。